

は、サッカーの練習と自主学習を毎日の取組としていた。サッカーの練習は継続できているのに、自主学習が続かない自分を振り返る。グループでの話し合いで「(勉強を) やりたい自分とやりたくない自分があるんだよね。勉強をやろうと思っても、つまらない、めんどくさいって思っちゃう」と打ち明ける。彼は好きなサッカーだけでなく、苦手なことにも努力し挑戦しようと思いつながら、弱い自分がいることを自覚している。グループの女子が「ハードルをさげる」という現実的なアドバイスをした。「もっともだ」と言いながら、でも彼は納得しない。ハードルをさげて取組をクリアしても、それでは「目指したい姿」にはならないと判断しているからだ。「飽きないいい方法があるよ。テレビをみながら、お菓子を食べながらやる。」彼女は自分の攻略方法をアドバイスするが、彼は「う〜ん」と考えこんでいた。結局「自分の課題に関わる問題は自分で解決し克服していかなくてはいけない」ということが、友達からアドバイスをもらったからこそ、彼なりにたどり着いた結論のようだった。

授業後「こういう話し合いは好き？」と聞くと、即座に「大好き」と返事が返ってきた。「違うグループでも話し合うの?」「うん、いろいろ、それで違う話も聞けるからいい。」自分と向き合い、高めようとする学びの一端を垣間見るような言葉だった。この気付きを契機にどのように活動を仕掛け、環境を整えることで、さらに生き方を深め、学びを深めるのか。学年の先生たちは、授業後にこの「わかばマップ」を検討しながら、手だてを考えていく。子どもを見取り授業をよりよくしていくための評価に、広瀬小は賢明に取り組んでいる。(文責：佐野・東京)

●春季研究会のお知らせ

恒例の春季研究会を下記の要領で開催します。多くの会員の参加をお待ちしています。

テーマ 『政治主導』の時代における学校と教師の自律性・創造性

期 日 2010年3月28日(日)

場 所 上智大学8号館 8-208教室

参加費 会員1000円、非会員2000円

日程・内容

10:00~10:10 開会行事

10:10~11:00 講演「教員免許制度の今後と学校教育の質」加藤幸次(上智大学名誉教授)

11:10~12:00 講演「広がるテスト体制とカリキュラム・ポリシー」澤田稔(上智大学准教授)

12:00~12:30 全体討論1

12:30~13:30 昼食・休憩

13:30~14:10 実践報告1「個性化教育を『始動』する学校経営の工夫」

佐久間茂和(台東区立東泉小学校)

14:10~14:50 実践報告2「2科目同時進行単元内自由進度学習~中学保健体育科での試み」

竹内学(東浦町立東浦中学校)

15:00~16:00 全体討論2

●第3回日本個性化教育学会全国大会(神戸大会)のお知らせ

2010年度の全国大会は、関西個性化教育学会のお骨折りにより、2010年8月7日(土)、8日(日)の両日(理学会は6日(金)の夕刻に開催予定)に、風光明媚な神戸国際大学(六甲アイランド)で開催されます。

年に一度、全国の同志が集い、実践や研究を持ち寄り、学び合う機会です。

プログラムの詳細については4月以降、順次ご案内いたしますが、まずは日程の確認と確保をお願いいたします!

なお、今回の大会も「免許更新講習」を兼ねての実施となります。前日6日(金)を含めた3日間で「選択講習」18時間分の講習になります。該当の先生方は是非この機会に!

●「個性化教育研究」論文投稿の〆切り迫る

今年度の学会誌「個性化教育研究」の論文投稿の〆切りが迫ってきました。準備中の会員は、3月31日(水)までに下記までお送り下さい。質問等も下記までお願いします。

〒184-8501 小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 日本個性化教育学会編集委員会委員長

浅沼 茂

Tel/Fax: 042-329-7351

E-mail: asanuma@u-gakugei.ac.jp

日本個性化教育学会

発行

日本個性化教育学会報

平成22年 2月13日

発行責任者

加藤 幸次

第9号

先頃、高浦勝義先生がライフワークでもあるデューイ研究を博士論文にまとめられ『デューイの実験学校カリキュラム』と題して黎明書房から刊行されました。そこで今回の箱根宿泊研修会では、初日に「高浦先生、デューイを大いに語る」というテーマで、高浦先生に研究の経緯やデューイ教育学についてのお考えを大いに語っていただきました。また、翌日には、会誌に載せる教育論文の書き方に関するレクチャーも行われました。今号はこの2つの話題を中心にお届けします。

平成21年度 日本個性化教育学会 箱根宿泊研修会

12月27日(日)

12:00~受付

12:25 日程説明

12:30~17:00

プログラム1: 講和と討議

「高浦先生、デューイを大いに語る」

(1) 高浦勝義先生の講話

(2) 松下晴彦先生の講話

(3) 質疑応答、討議

18:30~20:30 懇親会

12月28日(月)

9:00~10:30 事務局会

10:30~12:30

プログラム2: シンポジウム

「私は教育論文をこう書く」

加藤幸次先生 浅沼茂先生

奈須正裕先生

12:30 終了

「高浦先生、デューイを大いに語る」

明星大学教授 高浦勝義



高浦先生といえばデューイであるが、いつどのようにして?という我々の素朴な疑問に答えるかのように、ご自身の研究のあゆみを振り返りながら、今回の博士論文=著作を編まれた経緯を中心に話されていった。

大分大学での最初の論文を書かれた時には「デューイでもやってみるか」という気持ちで始められたという。以後、九州大学大学院に進まれてデューイの研究に明け暮れたと話された。戦後日本の教育界は「寝ても覚めてもデューイ一色だった」と述懐された。しかし、3、4年もするとデューイという名前が聞かれなくなった。それは、デューイの考えが悪かったのか、それとも日本の時代が変わったのか、それを調べてみようというのが出発点だったそうだ(もちろん後者だと付け加えられた)。

国立教育研究所時代は少々デューイから離れていたものの、4年前に研究所を退職され、シカゴに留学されたときに、デューイの中等教育について研究しようと思っていたそうである。

高浦先生によると、デューイ・スクールは今もあり、そのカリキュラムについては、この4、5年ほど研究的にも注目されているという。しかも、エレメンタリー・スクール・レコード(初等学校記録)は誰も研究で取り上げてはおらず、高浦先生が今回着目し研究を始められたものだという。訳すときには全訳をしようということで始められたそうだ。

高浦先生によると、デューイの研究は数あれど、カリキュラムについてのものは少ない。いろいろと整理していくと「よくこのようなものを書いたなあ」と自分でも思うと述べられた。アメリカでは最近デューイの見直しが始まっている。それに意を強くして書いたものである。この本を書くときに一番やりたかったのは4章(実験学校のカリキュラムの実際)。次に1章、2章と進んでいったと話された。

続いて、配布されたデューイの略歴や写真を元に、デューイの生涯と研究のあゆみについて話された。まとめの言葉の中の「デューイのカリキュラム論は今でも新しい気がする」「デューイ学会で生活科や総合の関連性について言うけれど、生活科や総合は形の上では違う」「今でもデューイのカリキュラム論はいいと思う」という言葉に、これまでの高浦先生のデューイ研究に対する熱い思いの一端を垣間見た気がした。(文責 中田・埼玉)

「デューイ(=高浦)のためのいくつかのtips」

名古屋大学大学院教授 松下晴彦

「デューイは長生きをした人で、どの時代をとっても研究者は一生を終わってしまうと言われます。私自身が高浦先生の何周目かの周回遅れでデューイを追っています。」このように話された松下先生。先生は、1) ジョン・デューイの思想と生涯 2) ジョン・デューイの教職経験 3) ジョン・デューイに影響のあった女性 4) 19世紀末から20世紀末の実験学校と背景 5) オキュペーション 6) 幾つかの概念 という柱立てで、話を進められた。

1) ジョン・デューイの思想と生涯

デューイの生涯は3つに分けて考えられる。

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

庶務部長 佐久間 茂和

〒114-0003 東京都北区豊島8-27

フレーシエル王子神谷2-914

tel03-3912-2797

e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ

http://zenkoren.com/

日本個性化教育学会 第9号

平成22年 2月13日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

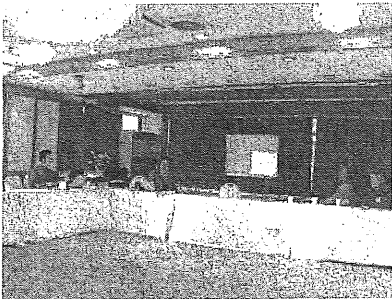
編集 広報部 中田 泰志



- (1) 観念論期 イギリスの新ヘーゲル主義に影響されている。
 - (2) 実験主義期 (シカゴ大学) 進化論などにも影響を受けている。
 - (3) 自然主義期 (コロンビア大学期)
- 時代の移り変わりにも影響を受けつつ、1890年代に考えた教育に関する考えは、生涯変わっていない。
- 2) ジョン・デューイの教職経験
デューイはハイスクールでの教職経験がある。その後ミシガン大学で、講師になる。途中でミネソタ大学に移ったとたん、恩師が死に、再びミシガン大学に移った。この頃、ミシガンプランというプロジェクトがあった。これは、ちゃんとしたカリキュラムを持っていて、きちんとハイスクールを卒業できれば推薦状でミシガン大学に受け入れるというものだった。デューイは、よくハイスクールに調査に行っていた。
 - 3) ジョンデューイに影響のあった女性
 - ・母親：かなり厳しく強い女性だったらしい。
 - ・アリス・チップマン：ミシガン大学時代 ハウスメイトで年上。結婚し6人の子どもを産む。
 - ・ジェイン・アダムズ：シカゴ大学時代 文通していた。
 - ・E. F. ヤング：シカゴ大学時代の社会人学生で教育科学を学ぶ。デューイ・スクールの運営助言を行った。後に全米初の女性教育長になる。
 - ・アンジア・イエジエルスカ・レヴィタス：小説家。ポーランドの移民調査の翻訳で知られる。乳幼児心理学者としてデューイを尊敬していた。
 - 4) 19世紀末から20世紀末の実験学校と背景
この時代は進歩主義運動が起こった時代である。デューイ・スクールは短期間で終わり、フランシス・パーカーのシカゴ学院の付属学校で教育実習を始めた。この学校は、デューイが作った実験学校とは性質を異にする。1890年代は、大量に移民が押し寄せてくる時代だった。英語が話せない子どもが多くおり、早く労働力として子どもを育てたいという背景があった。アメリカ文化に同化させることに、パブリック・スクールの関心はあった。
ここで、シカゴ大学教育学部が改組される。これは、実験学校の研究終了を意味している。デューイは、大学側にパーカーと自分の学校は別組織で、どうしても統合するなら後2年続けさせてほしいと願い出た。ところが、パーカーの急死でパーカーの学校も引き受けることになった。デューイはリストラを実行して、2つの小学校の統合を提案するも反対される。やむなくシカゴ大学を辞任。コロンビア大学へ移ることとなる。
 - 5) オキュペーション
仕事などと訳されている。ディシプリンとオキュペーションと区別してかかれている(How We Think)。デューイ教育学では、重要な用語である。
 - 6) 幾つかの概念
デューイにとっては、反省＝思考である。
「〇〇と△△」というタイトルがデューイには多い。これにはヘーゲルの影響が見られる。
デューイを理解するためには、背景を理解した上で考えていかなければならない。ヘーゲル的な思索の上になりたっていると考えている。

この後は、松下先生の話を受けて高浦先生からオキュペーションについて補足をされ、フロアからは、我々がカリキュラムを編成するときの原理をどこに求めるのかといったことや、生活科・総合が入ってきたときの状況とデューイの実験学校の頃との類似点などが話された。予定より延長しての熱気ある一時であった。(文責 中田・埼玉)

シンポジウム「私は教育論文をこう書く」 上智大学名誉教授 加藤幸次 東京学芸大学教授 浅沼茂 上智大学教授 奈須正裕



昨年9月に、学会誌「個性化教育研究」第1号が発行された。それを受けて、箱根の研修では、論文の書き方について浅沼先生、奈須先生、加藤先生がお話しされた。
はじめに、浅沼先生はご自分の論文から「ユーモア詩」を取り上げ、「笑いとは何か」を切り口に、子どもの生の声を人にわかるように一般化していくことで論文に仕上げるができることと話された。つまり、1つのテーマを追ってどのように料理していくか、その時の授業の工夫の部分にこだわるという論文になる。ただ、多くの実践研究は授業の概略を指導案を中心にまとめたものであり、そのままでは論文とは言えない。研究論文は、その論文の主題に即してドキュメントをどう切り取るかが問われることを強調された。

奈須先生もご自身の論文を提示され、日常の実践の中での不満を意識化して文章にすれば、論文になると話された。「ユーモア詩」も教師が自分の実践に不満を持っていたから詩を導入したのだろう。自分にとっての課題性がないと論文にならない。現場のせっぱつまった不満が論文の主題につながる。

加藤先生は、これまで論文を書かれてきた経験をもとに論文の意義について話された。そして、具体的に論文にするものとして、先行研究の上にオリジナルな観点を加えたもの、ある1つの点に焦点を当てた教育実践や授業実践に関するもの、という2つのタイプがある。

三者に共通していることは、日々の授業実践の中に論文のテーマがあるということである。それを意識して論文にすることが大事であり、説明文を書く程度の構成で書けばよいというまどめは、力強く感じられた。会員の皆様、論文を書いてみましょう。(文責：石澤・東北)

論文の書き方について 学会誌編集委員長 浅沼 茂

論文を書くにあたっては、特に、このように書けばすらすら書けるというような秘訣はない。自分が書くにあたって、何か書くに値する内容がそろっているかどうかが大切である。特に、教育実践に関わる論文は、無理して何か文章を書こうとするのではなく、これだけは伝えたいという内容があることが大切である。
多くの教育現場には、毎日何か出来事があり、そのことを綴っているものを読むだけでも私たちにはとても面白く感じられる。現場の教師には、それが当たり前過ぎるのか、日常的な出来事は書くことはないまま、やり過ごしてしまう場合が多い。とてももったいない。多くの事件や出来事は、私たちにとっては貴重な資料である。

論文を書くにあたって、問題となるのは、論文を書いているという意識から、このような日常的な出来事の記述をしないで、何か、他の人がつくった枠組みを無理して使い、それでもって説明しなければならないと思っている教師が多いということである。特に教案の書き方をそのまま授業記録であると勘違いして、知識、興味・関心、意欲、態度などの用語をあてはめて何か論文を書いた気になっているようなパターンが多いことは問題である。実際の授業の流れは、そのような分節化した枠組みでは動いていない。

授業にせよ、日々の出来事にせよ、学校にはストーリーがあり、そのストーリーの中で教育の営みは行われる。多くの教師は、ストーリーの重要性に気がつかない。もったいない。飲み会では、皆、この間こんな事があったと語ってくれるのに、いざ論文という構えてしまう。なぜだろうか。

一つには、この文章もそうであるが「論文とは何か」というようなマニュアルそのものが、なにか格式張ったように書かなければ「いけない」という気持ちを持たせることに原因があるのではないか。このように書かなければいけないというマニュアルは、逆効果なのではないか。私に言わせれば、子どもとの出来事の話しを聞いているだけで面白いのであるから、それをまず、そのまま綴ってみれば面白い。まず、自分たちの日常生活を綴ってみよう。

二つめには、綴ったらそれが論文の材料だと思って、自分流に分析してみることである。そのときに、興味・関心、意欲、態度などのように他の人が使っている枠組みを使わないことである。ルソーではないが、他人の権威ではなく、自分という権威をあてにしよう。そのとき、たまたま、他のこのような用語や概念が役に立つというときにだけ、他の人の概念を使おう。

三つめは、綴った文章が面白いかどうか、自分で読んでみよう。自分が面白いと思う文章は、他の人には面白くない場合があるが、でも自分で判断してみよう。

論文には、テーマは何か、仮説は何か、先行論文の分類と整理はあるか、論拠は何か、分析と考察はどうなっているか、結論はあるか、などいろいろと形式めいた約束ごとはある。けれども、教育実践の論文には、独自の生活世界の話が広がっており、必ずしもその形式で書かなければいけないというものではない。面白いストーリーを期待してますよ。

仙台市立広瀬小学校公開研究会報告（2010年1月29日）

仙台市立広瀬小学校は「評価開発は『授業の充実』『学びのある生活科や総合』のためにある」との基本コンセプトの下、より質の高い単元づくり、授業づくりのための評価として「広瀬小独自の評価観点」の位置づけを検討し、「評価の信頼性」を高める取り組みを行い、「気付きの高まりを見取る手立て」の開発を進めている。

校長は東北個性化教育学会会長の菊地修治先生だ。「創る」ことを教育信念とする菊地先生は、生活科と総合の2つの文部科学省研究指定（しかも評価の研究で）、なんと独断即決で受諾した。すべては先生たちが「いい授業をつくる」ことにチャレンジするため、何より広瀬小の子どもたちに「自分を拓き強く生き抜く力」を育むために。

広瀬小の総合は1年間大単元で、テーマや単元構想は学年協働でつくるが、実際の活動は学級を単位に独自に展開する。そこで、担任の独断的な評価にならないよう、東北個性化教育学会が研修会でも継続的に深めてきた「グループ・モデレーション」を実践してきた。同じ子どもの作品や学習カードでも、実際に学年の教師全員で評価を出し合うと高低の違いがでてくることに気付き、それぞれの評価理由や視点を互いに出し合うことで、共有点を見いだし評価の凸凹を概ね揃える検討を行うのである。これは子どもを見取る力を付けるのに多に効果があったようだ。また、評価の視点を明確にすべく、ループリックの作成にも取り組んできている。

授業は全学級公開。6年生は「共に生きる」をテーマに、様々な人との交流から生き方を学び、その最終段階として小単元「考えよう！これからの自分」という個人課題の追究に取り組んでいた。「こんな大人になりたい」という具体的なゴールイメージを抱き、それに近づく自分になるため、毎日の生活での「取組」を設定し継続的に活動していくという学習である。授業は、考えたことや友達の見解、学習履歴を書き記していく学習カード「わかばマップ」をもとに「取組」について自分なりに振り返り、それをグループで持ち寄って話し合う場面だった。

「サッカー選手を通して、努力したり挑戦したりする大人になりたい」という課題を持った男子児童

